



チェル救の財政危機を救ってください!!

正会員・賛助会員、そして…

カンパ(運営費)大募集!!

東電福島第1原発事故から5年が経過しました。チェルノブイリ原発事故からは30年です。福島では今なお10万人以上の被災者が避難を余儀なくされ、故郷の復興(原発事故の終息・除染・コミュニティーの再建)は、全く被災者の願い通りには進んでいません。

そんな手探り状態の中で、私たちチェル救は、皆さまの支援に支えられながら、地元の方々と一緒になって、現地南相馬市に「放射能測定センター・南相馬(とどけ鳥)」と「農地再生協議会」を立ち上げ、「汚染マップ作り」「食品の放射能測定」「保養の支援」、そして「菜の花プロジェクト」による「油菜ちゃん」の開発・拡販…などなど、現地に根を張って復興支援を続けています。「フクシマの復興」なくして、「日本の再生」はありません。

幸いにして、これらの活動が、点から線へ、そして線から面へと広がりを見せ、日本各地で「想い」がつながり、大きな反響を呼ぶようになってきています。

ところが、チェル救の台所(運営基盤)は、「キャンペーンに寄せられたカンパや民間企業からの助成金は、できる限り現地に届けたい」という方針を守ってきたため、運営資金が不足して「いよいよ切実な状況」を迎えております。いつも様々なご支援をいただいている中、大変恐縮ですが、運営資金に対するカンパにご協力をお願いいたします。

つきましては、正会員・賛助会員、そしてカンパ(運営費)を大募集します!

会費は「1口3,000円/年」何口でもOK、目標は1,000人(年間300万円)です。

(詳しくは、事務局までお尋ねください。) 理事長 原 富男



〒460-0012 名古屋市中区千代田5丁目11-33 STプラザ鶴舞5階B

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部(店番号150)

口座番号：普通 6949211

口座名義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 原 富男

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-228-6813(月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

3月1日 油菜ちゃんが「石けん」に大変身！@LUSH

2015年秋、南相馬での種まき会に、LUSHのスタッフの姿がありました。彼らは、油菜ちゃんが自社の石けんの原料になりうるかを見極めるため、やってきました。自ら畑に立ち、土に触れ、タネを播き、油菜ちゃんパワーを体感しにきたのです。

LUSHは、イギリスに本拠地を置く自然派化粧品メーカー。東日本大震災の被災地支援にたいへん力を入れており、自社製品の原料を東北で探し求めていました。そして油菜ちゃんが、そのLUSHの目に留まったのです。大きな問題点はふたつ、納入量と品質です。商品化には、「まとまった量を継続して納入する」ことが求められます。もう一つは、LUSHの高級石鹸の原料となる「品質



くかたまりをお好みの大きさに
切り分けます

を保持しているかどうか」です。量につ

いては、日本有数の菜の花栽培地になるほど畑の拡大がすみ、生産量の確保は目途がつきそうです。そして品質は、イギリス本社の検査でお墨付きをいただくことができました。こうして商品化が決定しました。

2月15日にはLUSH JAPAN 東京本社で、LUSH 始まって以来の記者数となった記者会見が行われました。

いよいよ3月1日、全国のLUSHの店舗の一角に、菜の花畑が出現しました。「つながるオモイ」と名付けられた新発売の

石鹸とともに売り場を飾ったのは、油菜ちゃん・農地再生協議会のメンバーの顔、顔、顔...でした。南相馬の農地再生へ

のおもいが、春の訪れとともに輝いていました。

さっそく名古屋市内の某店舗に足を運び、スタッフの方に許可をいただいて店内の写真撮影。居座る私に、撮影しやすいよう配置まで変えてくださいました。スタッフの方たちは、社内資料を読み、この石鹸と南相馬とのかかわりを良くご存知でした。お忙しい中、資料には書いていないであろう「油菜ちゃん誕生秘話」や、「チエル救と南相馬農地再生協議会とのかかわり」などをお話しする時間をいただくこともできました（居座っていましたので...）。そして、「いい話を聞かせてもらえてよかったです。お客様にも伝えていきたいです」と...。まさに“つながるオモイ”です。

LUSHの「つながるオモイ」の商品は、油菜ちゃんだけでなく、福島県いわき市の「おてんとSUN」が栽培している、オーガニックのコットンから作られた風呂敷（左下写真）もあります。菜の花をモチーフにした鮮やかな風呂敷で、石鹸とともにフクシマ



から「未来を信じるオモイ」の発信を、LUSHは手伝ってくれたのです。（市原佳代）

* * * * *

「おてんとSUNの風呂敷（菜の花）」4枚を正方形につなぎ合わせて、大きな風呂敷にしました（右下写真）。春のエコバックにして、街を歩いているのは私です。（美）



★開所 5 年目に入る「とどけ鳥」事務所は、新年度に向け新たな転機を迎えました。

- ①現状ボランティアの提案で、2013 年 4 月が最後だった川の放射能マップ作りの為、検体の採取作業を開始しました。3 年経過していますが、その後の変化を注視したいと思います。
 - ②「非破壊式放射能測定器」は、前号で助成金不採用の報告を行いました。その後「24 時間テレビチャリティ委員会」に申請を行い、3 月初めに採用の連絡をいただきました。新品の納入は 5 月中旬になりますが、メーカーのデモ機を 3 月末に設置していただき、4 月初めから訓練を兼ねながら測定を開始します。
 - ③20km 圏内の解除は、「4 月予定」から少し先へと延期になりましたが、とどけ鳥は 4 月から小高分所を開設して、検体の受付を行います。また、水道水定期測定は、いままで鹿島区と原町区の 5 水源でしたが、4 月からは小高区 4 水源を加えて、月 2 回の定期測定を行います。
 - ④原町区内 1 ヶ所で、大気サンプラー測定を 1 年間受託してきましたが、測定の延長が決まり、福島大学が実施している大気サンプラー測定（2 ヶ所）も新たに受託しました。
- たくさんの課題を抱えての新たな出発ですが、測定活動が継続できる体制確立に向け、走り続ける覚悟です。

★春の第 11 期測定準備も始めています。チェル救事務所でも募集のボランティアは、既に定員に達しました。地元の準備も怠りなく進めていきます。また、双葉郡富岡町の測定準備も完了し、3 月 26 日に 6 班体制で約 200 強のポイントを測定しました。とどけ鳥からの応援と富岡町民とのコラボでの実施です。

★(社)南相馬農地再生協議会は、搾油所建設の準備として、2 月末に帯広市の搾油所視察を行いました。完全オートメーション化された搾油装置は、目を見張るものがありました。ただ、当再生協議会が考えている「搾油後ゆっくりと沈殿・濾過を繰返す方式」とは少し違和感もあり、今後搾油所建設に向けての検討課題が見えてきました。6 月末からの収穫に向け、圃場の拡大に伴う収量増に対する乾燥機の不足を心配していましたが、追加の申請が採用され、2 台に増やすことが決まり、早速準備に入りました。3 月 1 日のラッシュジャパンの石鯛（つながるオモイ）販売開始の影響で、多くのマスコミから注目を受け、取材攻勢には少々食傷気味ですが、「菜種栽培／油菜ちゃん」と「小高区解除」をテーマとした放映があります。現地の様子をご覧ください。4 月 17 日(日)10:05～10:48 NHK 総合「第 3 回復興サポート in 南相馬」



「菜の花見会」も、まだまだ余裕があります。是非、皆様のご参加をお待ちします。

(4 月 30 日(土)10:00 道の駅「南相馬」集合です。)

★20km 圏内の 4 月解除は、数回の住民説明会で除染が完了していない状況を国が認め、解除の延期を通告してきました。インフラ整備は完了していますが、医療・教育・交通・買い物等は、早期帰還を叫びながらも未整備の状態で、市民の生活基盤が成り立たないのが現状です。行政の遅い動きに対して、年配者の手足となって暮らしに必要な片づけ・軽作業・買い物や病院等の付き添いなどを行う「小高サポートサービス」を住民自身が立上げ、活動を開始しています。また、2011 年 12 月から、一時帰宅の住民や作業員に温かい食事を提供し、小高の操業再開の先例として頑張ってきた「おだかのひるごはん」は、3 月 11 日で営業を終了し、鹿島区の仮設店舗で営業する「双葉食堂」が、5 月中旬頃にここに帰り営業を再開する準備に入りました。

駅前通りを中心に、「希来（きら）」「おだかぶらっとほーむ」「東町エンガワ商店」「信金」「郵便局」「散髪屋」…少しずつ人が集まっていますが、日常生活が支障なくできるかを考えれば、まだまだ厳しく、住民に負担を強いるのが現状です。帰還を急ぐのではなく、生活基盤の整備と保障の体制を整えるのが、国と市の責務です。

2016 年 東日本大震災犠牲者追悼式

東日本大震災犠牲者追悼式

主催：東日本大震災犠牲者追悼式 あいち・なごや実行委員会



あの大震災と原発事故から丸 5 年となる 3 月 11 日、13:00～19:00 に、名古屋市栄の久屋大通公園・久屋広場にて、東日本大震災犠牲者追悼式が行われました。

私たちチェル救も、追悼式の主催者「あいち・なごや実行委員会（14 団体）」の一員として



て、どのような追悼の場にするのかを考える、半年間の準備期間の協議に参加してきました。約 2 万本のキャンドルは、学生やボランティアの方々の手によって準備され、多くの賛同者・賛同団体が集まりました。

早朝からの会場設営では、心配された雨も降らず、献花用のお花、記帳のコーナーも整えられました。2 万本のキャンドルの点灯は、若い人たちを中心に、風と戦いながら根気強く行われました。

13:00 より式典が開始され、献花や記帳に、被災者や実行委員・一般の参列者など、多くの人が並びました。14:46 に、被災地へ向かって黙とうし（黙とうは 18:46 にも行われました）、震災を忘れないという静かな決意の宣言文が読み上げられました。



私たちは東日本大震災の犠牲になったおひとりおひとりを心から追悼致します。

静かに目を閉じて声なき声に耳を傾けます。私たちはあなたたちを決して忘れません。

私たちはこれからも被災地と被災者に心を寄せていきます。東日本大震災を教訓に災害に備えます。そして来年の 3 月 11 日に再び集うことをここに宣言いたします。

2016 年 3 月 11 日

東日本大震災犠牲者追悼式あいち・なごや実行委員会

実行委員長：石井 弘子



今年は初めて、大村愛知県知事の列席・追悼の辞がありました（なお、河村名古屋市長は、支援地の岩手県陸前高田市での追悼式に列席されたそうです）。午後から夕方までに、約 2,000 人の市民がこの追悼の場に足を運び、祈りをささげました。

今年もまた、風の冷たい一日で、身に染みる寒さとともにあの日のことを思い出し、犠牲となられた方を悼み、互いに語り合い、被災者の方々の 5 年間のご苦労の日々に思いを寄せた追悼の日となりました。

（戸村京子）

「ウクライナの子ども絵画展」in 名古屋

(戸村京子)



311 追悼日の 3 月 11 日（金）と 12 日（土）の 2 日間、名古屋 YWCA にて「ウクライナの子ども絵画展」を開催しました。ウクライナ・キエフ市の市民団体「ゼムリヤキ（同郷人）」の子どもたちの絵画 30 点と、福島県大熊町・熊町小学校の避難中の子どもたちの「私の夢」8 点を掲示しました。ウクライナの子どもたちの絵画は、小中高一貫学校の中学年（12 才～15 才）の作品で、チェルノブイリ事故を個性的にイメージした力作ぞろいです。

「ゼムリヤキ」代表 タマラ・クラシツカさんのご挨拶文の中に、
『ウクライナの子ども達の絵は、彼らが両親から聞いたりテレビで見たりしたチェルノブイリの出来事を、どのように受け止めているかの表れです。それは彼らの思いであり、想像です。
私たちの子ども達は、放射能に汚染された大地に暮らしたいと思っているのでしょうか？ 鉄条網のそばで暮らしたいと思っているのでしょうか？ 放射能に汚染された、あるいは添加物の入った食品を食べたいと思っているのでしょうか？ 病気になりたいと思っているのでしょうか？——その答えは、彼らの絵に描かれています。』そして『チェルノブイリ被災者である私たちは、生きている限りあの出来事について子ども達に、そして全世界に伝えていきたいと思っています。』とありました。

このようにウクライナでは、チェルノブイリの惨事について、子ども達に学校教育や絵画教室・各家庭などで、話し伝えていく努力がなされているからこそ、これらの絵画作品があるのです。ひるがえって日本では、フクシマをどう伝えていくべきか……。風化させず、記憶し記録していかなければなりません。

名古屋会場では、角度のあるガラス窓に並べた一枚一枚の絵が、それぞれ私たちに問いかけるような、印象的な空間となりました。2 日間で約 80 名の来場者でした。

「ウクライナの子ども絵画展」in 南相馬

南相馬市では、3 月 19 日（土）と 20 日（日）に、野馬追通り銘醸館「一番蔵」で開催しました。かつての酒造蔵をギャラリーにした、雰囲気の良い会場でした。こちらでは、会津の子ども達（避難している子ども達も？）の絵も 20 点飾りました。福島の被災地での開催でしたが、両日で約 70 名の来場者がありました。

南相馬市内の住民の方、新潟県に避難中のご一家、各地からのボランティアなど、いろいろな人が来てくださいました。「ここでこのような絵画展をやってもらってありがとう」と言ってくださるご家族連れもありました。

たくさんの方と、チェルノブイリや「ゼムリヤキ」の人たちのこと、「とどけ鳥」の活動などについてお話しすることができました。

最後に、「とどけ鳥」関係者の手際の良い絵の掲示や撤収作業に、感謝感激でした。





＜消防士基金チュマク代表と「火の用心」＞

【ナロジチ地区行政・ナロジチ病院・オブルチ病院など】

1月29日から2月5日まで、ウクライナを訪問しました。

今回の訪問は伊那の小牧さんと一緒に、久しぶりの二人旅となりました。いつも日本からは僕一人出かけ、現地で通訳してくださる方と合流することが多かったので、二人旅は気が楽です。ウクライナ到着早々、小牧さんのスーツケースが出てこないというアクシデントがあり、またジトーミルのホテルは、2月だというのに暖房が効かないということがありましたが、通訳の五代さんの手配で、ホテルを変更し乗り切りました。

★ナロジチ地区行政（ナロジチ町民の長レオンチュク氏）

2月1日に、ナロジチ・オヴルチ方面に行きました。最初はナロジチ行政。従来、ナロジチ行政は、大統領から任命された行政長・ナロジチ議会議長・ナロジチ町長の三者に、権限が分割されていましたが、制度が変わり、選挙の結果「ナロジチ町民の長」＝レオンチュク氏が全責任を持つことになりました。レオンチュク氏によれば、「ナロジチ地区は、大統領令により現在第2ゾーンであるが、これを第3ゾーンに変更する為のモニタリングが行われ、7月までには終了する」とのこと。ゾーンの変更で、生活や保障はどうなるのかという質問に対しては、「①被災者の保障に変更はない。②病院や保育園への支援が、国から行われる。③民間企業の投資が増える見込み。④住宅・畑の所有権が出来る」…との回答がありました。しかし、戦争の影響で、以前は900億グリーブナだった戦費が1,110億グリーブナ（さらに1,130億グリーブナに増える予定）となり、ナロジチに対する支援は大幅に減少しています。

こちらからは、南相馬市での「菜の花プロジェクト」の現状を報告しました。ナロジチの「菜の花プロジェクト」は、ナロジチ地区の行政（主体性）の問題と戦争によって中断していますが、「ナタネによる地域復興は可能なのではないか」と話を向けると、同感しておられました。またレオンチュク氏は、「福島が大変な時に来ていただき感謝している。これまでは魚をもらおうとしていたが、これからは自分たちで釣竿を使うようになりたい。自力で未来を切り開くために、広大な土地をどう利用するかが課題だと思っている」と語っていました。

★ナロジチ病院（院長マリヤ・パシェク氏）

「ナロジチの人口は減少している。地区の病院再編により、産科の分娩部分だけをオブルチ病院に移した。ナロジチの出産数は2015年で66人であり、コストがかかりすぎる。出産費用は国が持つ。診断はナロジチで行い、問題のない出産はオブルチ、問題のある出産はジトーミルで行っている。また病気の傾向は、循環器・癌・脳卒中が増えており、甲状腺は安定していると思われるが、追跡できていない」とのことでした。

★オブルチ病院（院長ムコラ・ムコラビッチ・ルツーク氏と産科医長）

「オブルチ病院は、ナロジチも含む地域中核病院である。1916年に設立され、ベッド数は231床、外来患者数は600人／日。原発事故被災者数は46,660人（内9,361人が子ども）、事故処理作業者は1,662人。人口58,296人中4万人が被災認定を受けている。出生については、2015年に485名生まれた（内66名がナロジチ籍）。出産した女性の100%が体に問題を抱えている。生まれた子どもの39%が障害を持って生まれる。妊婦の年齢は25～30歳。昨年生まれた485名中6名がジトーミル州立小児病院に送られた。

生まれた子どもに奇形はない。超音波診断で「異常に頭が大きい」ことが判った場合など、数は少ないが中絶を勧めている。生まれて暫くすると、体が黄色になる症状が出始めた。原因は不明だが青い光を当てて投薬すれば2～3か月で治る。妊婦の抵抗力が落ち、眼球の白い部分が黄色になる。

必要なものは、産科医療機械・器具、超音波診断機（中古でも）、救急車など。」

*事故から 30 年を迎える汚染地域では、妊婦の全員が体に異常を持っている事を知りました。また戦争は、被災者をいっそう苦しめています。今回の訪問は、私達の役割の大きさを強く感じる旅となりました。

*この文章は、訪問報告書の一部を抜粋したものです。全文を希望される方は「200 円（送料込）／部」でお送りしますので、事務所までお問い合わせください。

【事故処理作業者の今】

（伊那市 小牧）

3 年ぶりに冬のウクライナを訪問しました。ボリスポリ空港でさっそく両替。前回 1 ユーロ 10 グリブナだったのが今回は 28 グリブナ。通貨価値は 3 分の 1 に下がっていました。ということは物価はほぼ 3 倍になって、とりわけ年金生活者の生活を直撃しています。最低気温はマイナス 3~4 度。伊那より暖かい。ただし最高気温は 0~1 度ぐらい。1 月に襲った寒波の影響で、池や小河川は凍りついたままで、氷上での穴釣りの姿を見かけます。

1 月 30 日から 2 月 4 日まで、ジトーミルに滞在しました。この間、東京で開催される「核フォーラム」に招待され来日予定の事故処理作業者（ヘルマンチュク氏・ヴォズニョーク氏）、長年おつきあいしているリクビダートル基金（コバルチュク代表）、障害者基金（ヤリノフスキー代表）、消防士基金（チュマク代表）の事故処理作業者 3 団体と、じっくり懇談しました。

その際お聞きしたこと。

- ・年金は減らされるが医薬品は値上がりしていて、生活がとても厳しい。
- ・年 1 回必ず健康診断を受けている。ほぼすべての臓器に問題があるといわれる。
- ・医薬品の価格はこの 5 年間で 3.5 倍になった。 ・公共料金の値上がりが辛い。
- ・政府は我々事故処理作業者のことを忘れようとしている。 ・年金は医薬品の購入で消える。
- ・保養券・無料交通パス券など、次々無くなりつつある（カテゴリーによって異なるが）。
- ・今は国が医療の責任を負っているが、民営化され金持ち以外は治療を受けられなくなる。
- ・この 30 周年を境に、我々は完全に忘れられるだろう。もう死を待つのみだ。
- ・30 周年で改善を期待したいが、むしろ切り捨てられるだろう。
- ・事故処理作業に関わった仲間 289 名の内、今日現在までに 102 名が亡くなっている。
- ・今年は 30 周年記念の年だが、今年一年どのように過ぎていくのか全く分からない。我々事故処理作業者にとってプラスがあるのかわからない…等々。

事故処理作業者には、「医薬品の支給」「公共料金の減額」「公共交通機関の無料券支給」「住宅用地の提供」「保養費用減免」などの特典が与えられていました。しかし、相次ぐ政変や東部の内戦などにより、こうした被災者支援の予算は削られる一方。「この 4 月、三十周年記念行事は盛大に執り行われるだろうが、これを機に我々は切り捨てられていくのではないか」…そんな危機感を、みなさん強く抱いていました。最後に、日本の事故処理作業者へのアドバイスを求めたところ、「1.健康で賢くあれ」「2.金に惑わされるな」「3.自分たちの権利を守るために戦え」と、語ってくれました。

ジトーミルを離れる前日、非常事態局医療センターで行われた「血液生化学分析器引渡し式」に出席。この医療センターは、消防士基金が、最低限の予算しかつかないため手弁当で工事をし、2007 年に開所した消防士・事故処理作業者のための医療施設。一日 50 名弱の患者が訪れ、ガリーナ先生を中心に 14 名のスタッフで運営され、今回の分析器をはじめ日本の支援による機器も多く活躍している。一方、スタッフの人件費は国から出ているとのこと（11 人分だが）。チェルノブイリ法の規定「チェルノブイリ大災害によって被害を受けた市民およびチェルノブイリ原発事故の事故処理作業者に対する、時宜を得た健康診断、治療、被曝量確定を行う責任もまた国家にある」が、事故処理作業者の「自分たちの権利を守るための戦い」によって、かろうじて生かされているのだと思います。



＜血液生化学分析器の引き渡し＞

福島原発事故から 5 年が経過した。この間、何が変わり何が変わらなかったのか。最大の変化は、福島県における小児甲状腺がんの急増である。これまで検査を受けた 38 万人の中、166 名が甲状腺がんまたはその疑いがあると診断され 116 名が手術を受けたが、肺やリンパ節に転移したり、甲状腺の片方を切除したが再発した例も多い。発症率は事故前の約 100 倍に及ぶ。まさにチェルノブイリの再現である。小児甲状腺がんは、事故から 10 年目が発症のピークであることから、今後も更に増加するだろう。3 月 12 日「311 甲状腺がん家族の会」が結成され、被害に苦しむ患者や家族の支援を開始し、放射能との因果関係を追及する。

変わらないもの

メルトダウンした 1~3 号原子炉の内部がどうなっているかは、5 年経った今も全く分からない。内部探査用のロボットも、高い放射線量で電子回路が破壊され役に立たないからである。メルトダウンによって压力容器外に出た熔融核燃料が地下水に接し、汚染水が増え続ける状態も事故直後と変わらない。毎日約 400 トンの汚染水が発生しているが、その処理水を貯蔵するタンクはこれまで 70 万トン分に及び、限界（80 万トン）に近づいている。

変わらないものの最も大きなものは、放射能によって分断された地域社会や家族、様々なコミュニティである。未だに 10 万人を超える人々が故郷を追われ、家族同士がばらばらの生活を送っている。放射能の恐怖が友人・知人・家族の絆を分断し、互いを孤立させている。政府は、中間貯蔵施設を予定している大熊町・双葉町を除き、2017 年度にはすべての避難地域を解除し、住民を帰還させようとしているが、おそらく帰還する住民は 10%にも満たないだろう。理由は単純である。そもそも原発労働者の被曝基準であった「年間 20mSv 以下」を、一般住民の生活圏に当てはめる暴挙だからである。国の意図は明らかで、「規制を解除し帰還を認めれば、様々な補償金を打ち切ることが出来る」という、経済優先主義である。これは、ICRP（国際放射線防護委員会）の放射能被害対策に関する「ALARA の法則（1~20mSv の範囲で出来る限り低く）」の最悪の適用例である。「経済のためには国民の被曝もやむなし」というのが、安倍内閣の真意である。

変わったもの

一方で、変わったものも多い。最たるものは原発再稼働である。2 年に及ぶ原発なしの生活を国民が体験し、福島の再来を防ぐためには再稼働反対の声が大きいにも関わらず、「世界で最も厳しい」という根拠のない安全審査を基に再稼働を認め、立地市町村の原発依存症を復活させた。免震重要棟や避難経路の確保など、事故に備えたシステムを作らず再稼働を認めるやり方は、福島事故前に逆戻りであり、政府や原子力村のしたたかさの証である。

しかし、原発についての国民の声を反映する変化も起こり始めている。その一つは、「大飯原発 3,4 号機の再稼働を認めない」とする住民の訴えを認めた 2014 年 5 月 21 日の福井地裁判決と、2016 年 3 月 9 日、再稼働を始めた高浜 3 号原発の運転差し止め仮処分判決を出した大津地裁の英断である。これまで多くの原発裁判が、「国の基準に適合するか否か」という技術論だったのに対し、これらの判決は安全審査の基準そのものを問題にした点で画期的である。また、原発事故の刑事責任を問い、福島県民らが 2012 年 6 月に東電を訴えた裁判で、東京地検は 2 度にわたり不起訴処分をしたが、東京検察審査会による起訴相当の決定により、勝俣会長ら 3 名の東電元幹部らが 2016 年 2 月 26 日強制起訴された。これにより、福島原発事故の刑事責任が改めて問われることになる。こうした動きは、これまで事故の責任を不問にしてきた、国や原子力村のあり方を厳しく問う契機になろう。時代は変わりつつある。

（2016 年 3 月 23 日 河田）

チェルノブイリ／フクシマ講座に、あの一家からお手紙が届きました

福島第一原発の事故から 1 年半後にスタートした「チェルノブイリ／フクシマ講座」も、13 回目を迎えました。回を重ねていくうちに強く意識し始めたこと...それは「チェルノブイリとフクシマをつなぐ」ことです。これは、「チェルノブイリの被災者と長年の関わりを持つ、私たちにしかできないこと」と改めて気づき、11 回目からは、チェルノブイリの母親たちからの手紙を読みながら、交流に結びつける講座を始めました。「フクシマの被災者に、小さなつぶやきも心置きなく声にしてもらいたい」...そんな思いで行っています。

そして 1 月、チェルノブイリの被災者からフクシマの方たちに、新しく待望の手紙が届きました。手紙を書いたのは、チェル救のリーフレットの表紙に掲載されている「アヌーシカちゃん」のお母さんです。同じ困難を 25 年先行して味わってきた彼の人が、フクシマに心を寄せてくれています。これからも、少しずつ新たな手紙が届く予定です。講座でご紹介できるのが楽しみです。次回は、下記の日程で行います。ご参加をお待ちしております。

- 日時：4 月 2 日（土）10 時 30 分～12 時 30 分
- 場所：名古屋 NGO センター事務所
（名古屋市中区 YWCA ビル 7F）
- 参加費：300 円（避難者の方は無料です）
（6 月 25 日（土）も開催予定です）



〈ボヴクンご夫妻〉

私たちの国からとても遠くて、とても近い

親愛なる友人の皆様、こんにちは！

2016 年 4 月 26 日は、チェルノブイリの悲劇から 30 周年の記念の日となります。

チェルノブイリの悲劇は、ウクライナのみならず、すべての人類の脅威となりました。そして、チェルノブイリ原発で働き、プリピャチに住んでいた私たちとその子どもたち、そして現在の孫たちは、いつも思い出すでしょう。私たちの不幸に一番に答えてくださったのは、日本だったということ。

ヒロシマ・ナガサキの原爆の痛ましい結果に、勇気を持って立ち向かった人々が、現在フクシマ原発の悲劇に向き合っているのです。私たちすべてのウクライナ人から、同情のご挨拶を送ります。



〈アヌーシカさんと坊や〉

チェルノブイリを経験してきた私たちにとって、生存の瞬間瞬間が新たなものになりました。私たちは、人生の価値をより深く理解し始めたのです。それは、とても壊れやすく、人生のどの瞬間にも大切に守り、感謝すべきものです。太陽が照ることを、青空を、ふるさとに対しても喜ぶべきです。

私たちは娘に、「人生を楽しむこと」「あらゆる困難に耐えること」を教えました。私たちは多すぎるぐらいの病気を持ち、くじけそうでしたが、多くの試練を乗り越えてきました。神様は私たちの祈りを聞いてくださり感謝しています。孫息子の誕生は大きな喜びです。

親愛なる日本のお友達のご健康・力強さ・人生のすべての困難に打ち勝つ気力がもたらされることを、願っています。

あなた方は強く、必ずや困難に打ち勝たれることと信じています。

大きな尊敬をこめて ボヴクン一家より

クリスマスカードあいがとう！

(山盛)

2015 年度カードキャンペーンは、たくさんの方々のご協力で、無事終えることができました。

ご協力くださった方々へのチェル救からのお礼状と、ウクライナ・南相馬から届いたメッセージを掲載いたします。

お礼状

梅の花が咲き、寒さの中にも春の足音が聞こえる今日この頃。皆さま如何お過ごしでしょうか。

さて、2015 年 10 月から開始いたしました「クリスマスカードキャンペーン」には、たくさんの皆さまのご協力をいただき、誠にありがとうございました。おかげさまで、ウクライナ・チェルノブイリ原発事故被災地の子ども達、そして東電福島第一原発事故被災地の福島県南相馬市の子ども達に、心づくしの暖かい素敵なカードを贈ることができました。ウクライナそしてフクシマ、合わせて 2,757 通ものカードを、折鶴や折り紙のかわいいサンタさんなどとともに届けることができました。これも一重に皆さまのご協力のおかげと、心より感謝申し上げます。

カードを受け取ったウクライナ、そして南相馬の子ども達の笑顔あふれる写真や、学校・幼稚園からお礼のメッセージが届いております。この度、皆さまに私どものお礼とともに、ご報告いたします。

クリスマスカードキャンペーンは、チェルノブイリ救援・中部が活動を始めた当初より行っております「心の支援」です。被災地において、世界から忘れられていくのではないかとという孤独感の中にいた人々、そして子ども達へ、「私たちは決して忘れない。今この時、遠く離れていても、皆さんのそばにいます。」という思いをカードに載せ贈って参りました。このカード作りは、老若男女どなたにでもできることから、本当にたくさんのご協力を得ており、受け取る子ども達は喜びに包まれております。

気の早い話ですが、今年も秋からこのキャンペーンを開始する予定です。どうぞ、お友達やご家族、職場の皆さま、サークルなど、広くお声掛けいただき、このキャンペーンにご協力いただければ幸いです。冬のトンネルを抜け、いよいよ本格的な春の訪れが参ります。

どうぞ、ご自愛のほど、お元気に訪れる春をお迎えください。

2016 年 3 月吉日 チェルノブイリ救援・中部

以下は、ウクライナと南相馬から届いたメッセージです。

ナロジチ町「お陽さま」幼稚園より

親愛なる日本のお友だちの皆さん！

ナロジチの子ども達は、新年を前にしてお届けいただいたクリスマスカードに、心より感謝しております。もう長年にわたり、皆さんが私たちをサポートし、ご支援もくださり、喜びとお祝いの気分を与えてくださっているのは、本当に嬉しいことです。

「お陽さま」幼稚園の子ども達も、母親たちと一緒に頑張って、皆さんのためにクリスマスと新年のカードを準備しました。子ども達はそれに、自分たちの思い、温かい気持ち、希望と夢を込めて作ったのです。皆さんとの今後の協力、サポートと支援に期待しています。

当幼稚園の職員、子どもたちと保護者は、いつでも皆さんの、親愛なる日本のお友だちのおいでをお待ちしています。

南相馬市「青葉幼稚園」より

ウクライナの皆さまへ

先日は、子ども達のために素敵なクリスマスカードをいただきまして、ありがとうございました。それぞれに心のこもったカードに、子ども達も大よろこびでした。同じ思いで生きていることに共感するとともに、心の支えとなりとても心強さを感じました。今年も残すところあとわずか…。無事に終わることができ、ほっとしております。日本・ウクライナの皆様にとっても、来年もよき年となりますようお祈り申し上げます。

つながろう福島・なくそう浜岡原発 3・11 追悼 東三河のつどい(3月6日)

豊橋駅前広場で行われる 3・11 追悼集会は、今年で 5 回目です。2012 年、反原発を掲げて活動する東三河の 4 つの市民団体が、実行委員会を作って始めました。

第 1 部は、お楽しみ企画。地元のバンドによるメッセージソングや、民族舞踊ユニットの和太鼓と踊り、今年初登場の若者達のアフリカ太鼓バンドなどで、参加者だけでなく、駅周辺にいる人達にも参加を呼び掛けるアピールをしました。また広場の周りでは、これも 2012 年から続けている「おいでん福島っ子」という保養プロジェクトの活動記録の写真のパネル展示、「チェルノブイリ 28 年目の子どもたち」のビデオ上映、「豊橋命と未来を守る会」の子ども向けワークショップ「ワッペン作り」。そして、私の所属する「さよなら原発東三河ネットワーク」は、昨年に続いて甘酒の無料サービス。駅周辺で 2,000 万人署名活動もしました。



＜追悼集会の催事ステージ

(2016. 03/06) >



＜被災後、埼玉県から名古屋に移住した親子のスピーチ

(2016. 03/06) >

2 時から集会が始まりました。実行委員長の挨拶に続いて、参加者全員で黙祷（時間通りではないですが）。次に被災者からの訴え。埼玉から名古屋に母子避難している三原香奈子さんと小学校 3 年生のお嬢さんが、絵本を交えながら、この 5 年間の思いを語ってくれました。ちなみに、2012 年の訴えは「プロメテウスの罠」（3 月 3 日朝日）に書いてある

ように、当時、安城市に転居されていた大沼勇治さんご夫婦と赤ちゃんにきていただきました。

続いて、三上元湖西市長（「脱原発をめざす首長会議」の世話人）の連帯あいさつ。ここで、チャリティワークのメンバーの到着。3 年前から、浜岡原発から豊橋までの 80km を、前日の朝から「おいでん福島っ子」の寄附を集めながら歩くという試み。

完走した男女 2 名の思いが語られ、最後に「原発再稼動に断固抗議し、原発政策の転換を求める決議」が読み上げられて、パレード出発。駅前から中電までの往復 1 時間、横断幕やプラカード、士気上がるアフリカ太鼓やいろんな鳴り物、シュプレヒコールで約 250 人が脱原発を訴えました。

福島の実状を知ってください「ピースあいち」で写真展(2/23~3/12 開催)

東京電力福島第一原発の事故から 5 年になる。故郷を離れ、まだ故郷に帰れない人たちは、不慣れな避難先で 5 年を過ごした…新たな地で、ささやかな楽しみを見つけてくれたでしょうか？

毎年、被災地の現状を写真展示してきた「ピースあいち」との協力で、今年は、救援・中部が知っている福島県南相馬市の現状を、写真とグラフで紹介しました。

「一人でも多くの人たちに知ってもらいたい」「救援・中部の支援者の皆さんにも、活動を紹介できる良い機会になる」と、綿密な打ち合わせを繰り返したおかげで、充実した内容の展示になりました。中日新聞（右）でも紹介されました。見ていただけましたか？

辛い記憶は、時間を経ると癒され薄れていくものですが、たった 5 年で忘れてしまうのは、あまりにも早すぎます。被災の問題は何も解決されていないのに、あなたも忘れてしまったら、手を差し伸べるのは誰でしょう？ （美）



事務局便り

チェルノブイリから 30 年、福島から 5 年。

今年の春はそのような時を迎える。ウクライナもフクシマも原爆も、放射能は人の手に余る。キュリー夫人は余計なものを発見したのだろうか。しかしながら、X 線写真やがん治療など病気の治療においては命を守る。が、そのガンの発症も、放射線の影響が大きいともいわれている。・・・私の頭では整理できない・・・私には、それぞれの被曝者の方々に心を寄せていくことしかできません。あなたも一緒にいかがですか。皆様。

チェルノブイリ救援・中部へ、物心両面のご支援を賜りたく、切にお願い申し上げます。(会計 上田)

新発売！「つながるオモイ」を手にとってくださいね！(P2 参照)

LUSH の店舗は、愛知県内に 9 カ所もあるのです。某情報で「油菜ちゃんは石ケンになって発売されます」と聞いた時から、ソワソワ。新しいカタログが並ぶ頃から店舗の偵察に通い、カタログが積まれたのを見つけた瞬間、「一冊、いただいても？」とうやうやく手にしました。

私が蒔いたかもしれない菜の花畑の黄色い花々満載！

津波による塩害と放射能の風評被害で、水稻作りを断念せざるをえなかった南相馬の皆さんが、「先祖から受け継いだ土地で、これからも作物を作り続けるぞ」という強い意志で生み出した「油菜ちゃん」が、新しく姿を変えてデビューしました。

もちろん「油菜ちゃん」は、料理に使い続けていきますよ。でも、お風呂では「つながるオモイ」の石ケンを一度・・・いえ、何回でも使ってくださいね。(美)



編集後記

☆2011 年のあの日から、毎年 3 月 11 日は冬に逆戻りしたような寒さが続く。東北のひとたちが味わった“あの日”の寒さと困難と悲しさを忘れないための、天からのささやかなおまじない。(佳)

☆駅のホームで新卒の若者たちが「名刺の渡し方」で熱弁中。研修先で学習した方法を賑やかに情報交換していた。メールでは伝わらない細やかな気配りが、大人になると大事なことだね。(美)

☆先日(3月22日)、今度はベルギーのブリュッセル(国際空港や地下鉄)で、「同時多発テロ」が発生した。早速、「ISIS(イスラム国)」が犯行声明を出している。このテロは、トルコのエルドアン大統領(とその背後にいる勢力)たちが、自ら演出した「難民流入騒動」を利用して欧州に送り込んだ実行犯による、「偽旗作戦」である。自称「イスラム国」は、「ISIS」「IS」「ISIL」・・・と、ここところ呼び方が変わったが、今では「ダーイシュ(Daesh)」で統一されるようになっている。これは「Daesh」が、アラビア語の「Daes=足で何かを踏みつぶす者」や、「Dahes=仲違いを引き起こす者」という言葉の発音にそっくりであり、世界中がその実態(他国を侵略して紛争を作り出す、ネオナチの傭兵であること)に気づいているからである。「ダーイシュ」の資金源であるトルコ・サウジ・イスラエルに対して、露・米・中・英・仏・・・すべての国連常任理事国が、「戦争犯罪国」とであると断定している。中東紛争の元凶が排除され、中東和平の訪れる日が刻一刻と近づいている。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473